

講義 バガヴァッド・ギーター イントロダクション

ニューヨーク

1966年2月19-20日

Part 1.

2月19日

プラブパーダ:

我が師に尊敬の礼を捧げる、無知なる闇に盲いた我が眼を知識の松明もて開き、この物質の世界に主チャイタンニヤの希みを満たす使命をもたらしたもうたシュリーラ・ルーパ・ゴスワミ・プラブパーダは何時その蓮華の御足に我を保護したもうや。我が師の蓮華の御足と献身奉仕の道にある全ての教師に我が尊敬の礼を捧げる、全てのヴァイシュナヴァと6人のゴスワミに尊敬の礼を捧げる、シュリーラ・ルーパ・ゴスワミ、シュリーラ・サナータナ・ゴスワミ、ラグナータ・ダーサ・ゴスワミ、ジーヴァ・ゴスワミそしてその同胞に。シュリー・アドヴァイタ・アーチャーリヤ・プラブ、シュリー・ニチャーナンダ・プラブ、シュリー・チャイタンニヤ・マハープラブ、そしてシュリーヴァーサ・タークラを長とする主の献身者たちに。主クリシュナの蓮華の御足に尊敬の礼を捧げる、シュリマティ・ラーダーラーニーそしてラリターとヴィシャカーを長とするゴピーたちの蓮華の御足に尊敬の礼を捧げる。愛しきクリシュナよ、慈悲の大海、苦しむ者の友、創造の源。牛飼いたちのあるじ、ゴピーたちとりわけラーダーラーニーの愛する者。主に我が尊敬の礼を捧げる。ラーダーラーニーに尊敬を捧げる。その肌は溶けた黄金に似て、ヴリンダーヴァンの女王、ヴリシャバーヌ王の娘、主クリシュナに愛しき者。主のヴァイシュナヴァ献身者たち全員に我が尊敬の礼を捧げる、彼らは望みの木のごとくあらゆる者の望みをかなえ、落ちた魂たちを憐れむ。シュリー・クリシュナ・チャイタンニヤ、プラブ・ニチャーナンダ、シュリー・アドヴァイタ、ガダーダラ、シュリーヴァーサ、ほか献身の途にある全員に尊敬の礼を捧げる。我が愛しの主、そして主の精神的エネルギーは、主への奉仕に我を従事させたもう。今我はこの物質的奉仕に困惑す、我を主への奉仕に従事させたまえ。

ギーター・ウパニシャッドへの序文

A. C. バクディヴェーダント・スワミ

シュリーマド・バーガヴァタム、他惑星への容易い旅、の著者。バック・トゥ・ゴッドヘッド誌編集者。

バガヴァッド・ギーターは「ギーター・ウパニシャッド」、ヴェーダの叡智の精髓、としても知られ、ヴェーダ文献の諸ウパニシャッド中、最も重要なものとされています。このバガヴァッド・ギーター、英語で解説されたものが既に多くあるのに、なぜこの英語解説版バガヴァッド・ギーターが必要なのかはこのように説明できます。ある・あるアメリカ人のご婦人ミセス・シャーロット・ル・ブランが私に尋ねました、どの英語版バガヴァッド・ギーターを読めばいいかと。もちろんアメリカにはたくさんの英語版バガヴァッド・ギーターがありますが、しかし私の見た限りアメリカにもインドにも、どれも厳格に権威ある版とはいえない版のみでした。なぜならバガヴァッド・ギーターの解説に自分自身の論を述べるばかりで、ありのままのバガヴァッド・ギーターに精神に触れていないからです。バガヴァッド・ギーターに精神はバガヴァッド・ギーターそのものの中に述べられておりません。それは喩えれば、薬を服用する時には、その薬のラベルに書いてある用法に従うこと。薬を服用する時に自分勝手な方法や友人の指示ではだめで、壘のラベルにある用法と医師の指示に従わなければなりません。同様に、バガヴァッド・ギーターもまた、その話し手である神ご自身がご指示なされたそのままに受け取られるべきであります。

バガヴァッド・ギーターの話し手は主シュリー・クリシュナです。クリシュナはバガヴァッド・ギーターの全頁に Bhagavānバガヴァーン、至上主神、として言及されており、もちろんbhagavānは力ある者や力ある半神を指す場合もありますが、ここにおけるbhagavānは明確にシュリー・クリシュナを指しており、偉大なる人物。しかし同時に我々は主シュリー・クリシュナを知らなければならない。全てのアーチャーリヤたちが確認するとおり、つまり、シャンカラチャーリヤ、ラーマヌジャチャーリヤ、マドゥヴァーチャーリヤ、ニンバルカ・スワミ、そしてシュリー・チャイタンニヤ・マハープラブほか多くのインドにはたくさんの権威ある学者やアーチャーリヤがおります。つまり、ヴェーダの知識の権威であります。彼らすべてが、シャンカラチャーリヤも含め全員がシュリー・クリシュナを至上主神として認めております。主ご自身もまた自身を至上主神としてバガヴァッド・ギーターにおいて立証なさっておられる。ブラフマー・サンヒターおよび全プラーナにおいてもそのように承認されております。特にバーガヴァタ・プラーナでは(シュリーマド・バーガヴァタム1巻3章28節) 故に我々は至上主神により指示されたそのままにバガヴァッド・ギーターを取るべきです。バガヴァッド・ギーター第4章で主はこうおっしゃっておられる(バガヴァッド・ギーター4章1節)(バガヴァッド・ギーター4章1節)(バガヴァッド・ギーター4章2節)(バガヴァッド・ギーター4章2節)(バガヴァッド・ギーター4章3節)(バガヴァッド・ギーター4章3節) 主はアルジュナにこう述べられた「このヨガ、ヨガのこのシステム、バガヴァッド・ギーター、は初め我により太陽神に語られ、そして太陽神がマヌに伝えた。マヌはイクシュヴァークに伝えた。このように、師弟継承により、順々に、このヨガのシステムは伝えられる。時を経て現在のこのシステムは失われた。故に、我は今その同じ変わらぬヨガのシステムを君に語る、バガヴァッド・ギーター、ギーター・ウパニシャッド、というこの同じ変わらぬ古いヨガのシステムを、君は我が献身者、そして君は我が友。故に君のみがこれを理解する」要旨はこうです。バガヴァッド・ギーターは特に主の献身者の為の論である。超越主義者には3クラスあります。jñānī、yogī、bhakta。すなわち、非人格主義者、瞑想者、献身者たち。そしてここに明確に述べられている。主はアルジュナにおっしゃった「我は君に語る、君をparamparāの最初の者とする。古いparamparā、師弟継承、は今や壊れ、故に我は再び新たなparamparāの確立を望む。太陽神からほかの者たちへと降り伝えられし、その同じ思想の線上に、だから君は、君はそれを取り、それを配れ。今このシステム、バガヴァッド・ギーターのヨガのシステムは君を通して配られる。君はバガヴァッド・ギーター理解の権威となる」今ここでバガヴァッド・ギーターは特にアルジュナに、主の献身者、クリシュナ直接の生徒、に授けられております。それだけではなくアルジュナは親しくクリシュナの友人であります。故にバガヴァッド・ギーターは、クリシュナと似た諸性質を持つ人物により理解される。すなわちその人は献身者でなければならない、主と関わりある、直接関わりのある人物でなければならないということです。

主の献身者になるや、主と直接の関わりを持つこととなります。これはたいへん長い論題でありますが、簡単に言いますと、献身者は5つの方法で至上主神との関わりを持つ。受動的な状態での献身者、積極的な状態での献身者、友人としての献身者、親としての献身者、夫婦関係にある恋人としての献身者。アルジュナは主と友人関係にある献身者でした。主は友人になりうるので、もちろん、この友情と、我々が俗世で持つ友情の概念との間には、大きな隔たりがあります。これは超越的な友情であり、誰もが主とこの関係になるというわけではありません。誰もが主と特定の関係を有し、その特定の関係は献身奉仕の完成により呼び起こされます。我々の生の現状においては、至上主を忘れてしまっているばかりか、主と自分との永遠なる関係をも忘れてしまっている。一切生類、何百億、何千億、無数の生命体、その一つ一つ、全ての生命体が、その一つ一つ、全ての生命体が永遠に主と特定の関係を持っている。それを svarūpaと呼びます。Svarūpa。そして献身奉仕のプロセスにより、自分のその svarūpaを甦ら

せることができる その段階をsvarūpa-siddhi、自らの本質的立場の完成、と呼びます アルジュナは献身者であり、主と友人として接触しておりました このバガヴァッド・ギーターはアルジュナに説かれた、ではアルジュナはどうそれを受け取ったか? どのようにアルジュナがバガヴァッド・ギーターを受け取ったかは10章にあります ([バガヴァッド・ギーター10章12節](#)) ([バガヴァッド・ギーター10章12節](#)) ([バガヴァッド・ギーター10章13節](#)) ([バガヴァッド・ギーター10章13節](#)) ([バガヴァッド・ギーター10章14節](#)) ([バガヴァッド・ギーター10章14節](#)) ここで、アルジュナは言う、至上主神からバガヴァッド・ギーターを聞き、アルジュナはクリシュナをparam brahma、至上ブラフマン、として承知する ブラフマン 生命体は全てブラフマンです しかし至上なる生命体すなわち至上主神は至上ブラフマン、つまり至上なる生命体です そしてparam dhāma Param dhāmaは、そは一切の至上なる安息、という意味です そしてpavitram Pavitramは、そは物質の汚染なく純粹である、という意味そしてpuruṣamと呼称されております Puruṣamは至上なる享樂者 śāśvatam śāśvatamはその初めより、の意味で、そは原初の人なり divyamは超越的 devamは至上主神 ajam、生まれることなく vibhum、最も偉大なるもの さて、クリシュナはアルジュナの友達だったから、故にアルジュナはこんなことを自分の友達に言っているのではと疑われるかもしれませんがしかしアルジュナは、バガヴァッド・ギーターの読者の心からその類の疑念を取り除くべく自分の提議を権威者たちにより立証しております アルジュナは言う、主シュリー・クリシュナは至上主神として承知するのは、自分アルジュナばかりではない ナーラダ、アシタ、デヴァラ、ヴィヤーサという権威たちもそう承知している、と これらの人物はヴェーダの叡智を配る偉大なる人物たちです 全てのアーチャーリヤたちが認める人物たちであります 故にアルジュナは言う「主が今我に語りし全てのことを、我は全き完璧なものと受け取らん」

([バガヴァッド・ギーター10章14節](#))「主が語りし全て我は取り、我は信ず、それら全き正しきもの 至上主神なる御身はまこと理解しがたき 半神らによりても御身は知られることなし 半神らによりても御身は知られることなし」 すなわち至上主神は人間より優れた者たちによっても知られることがない どうして人間がシュリー・クリシュナを理解できましょうか? その献身者になることなくして? 故にバガヴァッド・ギーターは、主シュリー・クリシュナの献身者の精神において吸収されるべきであります 自分がシュリー・クリシュナと同等、同じレベルである、と思っはならない あるいはシュリー・クリシュナを普通の人間、たいへん偉大な人物であるにしても、と思っはならない そうではない 主シュリー・クリシュナは至上主神である ですから少なくとも理論的に、バガヴァッド・ギーターの声明 アルジュナの声明、その断言について バガヴァッド・ギーターを理解しようとするならば シュリー・クリシュナを至上主神と承知するべきであり そして、その従順な精神で… このバガヴァッド・ギーターを従順な精神と聴覚による受容により受け取らない限り バガヴァッド・ギーターを理解することは至難である これは大いなる神秘である故に ですからこのバガヴァッド・ギーター… このバガヴァッド・ギーターが何であることを概括しますと このバガヴァッド・ギーターは人々を解放するためのものです この物質的実在という無知からの解放です 誰もがさまざまな困難を抱えており アルジュナもまたクルクシェートラの戦いを戦うことに困難を抱えていました そしてアルジュナはシュリー・クリシュナに全てを委ね 故にバガヴァッド・ギーターは語られた 同様に、アルジュナに限らず我々は誰もがいつも不安に満ちている 我々のこの物質的実在のために Asad-grahāt それは…我々の実在は環境、我々をとりまく環境、の中にあり、非実在である しかし実際は、我々は非実在ではない 我々の実在は永遠である しかし何らかのかたちで我々はこのasadtに入れられている Asatは「実在しないもの」の意味です 自らが何であるのか、なぜこの苦境にあらねばならないのか、について問うたくさんの人間の中から… この状態に目覚めない限り 「なぜ自分

は苦しまねばならないのか？ 自分はこのような苦しみは望まない 苦しみを解決するために努めたが、できなかった」 その状態にない限り、完璧に人間とは考えられません 人間性はこうした問いがその心の中に目覚めるときに始まります ブラフマ-スートラにおいてこの問いはbrahma-jijñāsāと呼ばれる Athāto brahma jijñāsā そして人間の全ての行為は失敗・怠慢であるとされる この問いを心の中に持たずに為されるならば ですからこうした問いが心の中に目覚めた人々 「私は何なのか、なぜ苦しんでいるのか どこから来て、死後はどこへ行くのか」 こうした問いが正気の人間の心の中に目覚めたとき そのとき実際にその人はバガヴァッド・ギーター理解に適切な生徒である そしてśraddhāvānでなければならない Śraddhāvān 尊敬を 至上主神に深い尊敬をもたなければなりません そうした人物、その理想的な人物が、アルジュナだったので

ですから主クリシュナは、主は降臨する。yadā yadā hi dharmasya glānir bhavati ([バガヴァッド・ギーター4章7節](#)) 生の真実の目的を確立するために。人が人生の真実の目的、人間という形態の生の使命を、忘れてしまったとき、それはdharmasya glāniḥと呼ばれます。人間の職務の乱れ。その状況にあってはたくさんの、たくさんの人々のうち、目覚めさせる者、自らの立場を理解する精神を目覚めさせる者、その者にこのバガヴァッド・ギーターは語られる。我々は無知という雌虎に呑み込まれたかのようにであり、そして主は、生命体にいわれなき憐れみをかけてくださる主は、特に人間の為に、バガヴァッド・ギーターを語った。その友人アルジュナを生徒として。もちろんアルジュナは、主クリシュナの同僚であり、無知を超えておりました。しかしなお、アルジュナはクルークシェトラの戦場において無知に置かれた。生の諸問題について至上主に問う為に。主が人間の未来の世代の恩恵の為、それらに答えられるように。人が人生を設計し、行動し、そしてその生が、人間の生のその使命が完遂できるように。このバガヴァッド・ギーターにおいて論題は5つの異なる真理を包括します。第1の真理は神とは何か。神の科学の準備研究です。その神の科学がここで説明されています。次に、生命体たち、jīva、の本質的立場。Īśvara と jīva。主、至上主、はĪśvaraと呼ばれる。Īśvaraとは「制御者」、そしてjīva、生命体たちは、主 Jīvaたち、生命体たちはīśvara制御者ではない。制御されるものです。もし「私は制御されていない。私は自由だ」というなら、正気の人とはいえません。生命体というものはあらゆる点で制御されています。少なくとも、その条件付けられた生において制御されています。ですからこのバガヴァッド・ギーターにおいてこの論題はīśvara 至上の制御者、とそして制御される生命体たち、そしてprakṛti、自然、物質的自然、を包括します。そして次に、時間、全宇宙の实在の持続、つまり物質的自然のこの出現の持続、そして時間の持続、永遠なる時間。とそしてkarma。Karmaとは「活動」を意味します。あらゆるもの、全宇宙、全ての宇宙的出現はさまざまな活動に満ちています。特に生命体は、皆さまざまな活動に従事します。ですから我々はバガヴァッド・ギーターから、īśvara、神とは何か。jīva、生命体たちとは何か。prakṛti、この宇宙的出現とは何か。どのように時間により制御されるか。そしてこれらの活動とは何か、を研究する必要があります。これら5つの論題のうち、バガヴァッド・ギーターにおいて立証する、至上神、あるいはクリシュナ、あるいはブラフマン、あるいはパラマートマー、主 どの呼んでもかまいません。しかし、至上の制御者である。至上の制御者がいるのです。ですから至上の制御者は全てのうち最も偉大である。そして生命体たちは、その至上の制御者と質において似ている。至上の制御者、主は 全宇宙現象を制御し、物質的自然を制御し、どのように主 それはバガヴァッド・ギーターの後の章で説明されます。この物質的自然は自立してはいない、と。物質的自然は至上主の指示の下に動いている ([バガヴァッド・ギーター9章10節](#)) 「この物質的自然は我が指示の下に働く、」 mayādhyakṣeṇa、「我が総監督の下に」

ですから、我々は考え違いをしているのです。宇宙の自然に起きる素晴らしいことを目にして、それら素晴らしい出現の背後に、制御者がいるということを知るべきです。制御されることなくして何も出現はできない。制御者について考察しないのは幼稚です。例えば速くて優れたエンジン装置を持った自動車は道を走っている。子供は「どうやってこの自動車は走ってるんだろう？馬も引き手もなしで？」しかし正気の人、大人なら知っています。自動車内部にエンジン装置があっても運転者がいなければ車は動けないと。自動車のそのエンジン装置、あるいは電力発電所において…現代は機械の時代です。しかし我々はいつも機械の背後を知るべきです。機械の素晴らしい働きの背後に、運転者がいる。至上主が運転手、adhyakṣaです。主は至上の神格、その指示の元に全てが作動する。これらjīva、生命体たちは、このバガヴァッド・ギーターにおいて主によって認められています、我々は後の章で知ることになりますが、生命体たちは至上主の本質的部分であると。Mamaivāṁśo jīva-bhūtaḥ (バガヴァッド・ギーター15章7節) Amśaは「本質的部分」黄金のひとつかけらも黄金で、海水の一滴も塩からいように、同様に、我々、生命体たちは、至上の制御者のīśvara、Bhagavān、主シュリー・クリシュナ、の本質的部分であり、我々は持っている、つまり、質的に至上主の全ての質を微小に持っている。なぜなら我々は微小なīśvara、従属するīśvaraであるからです。我々もまた制御しようとする。ただ自然を制御しようとしています。現代では空間を制御しようとしている。模造の惑星を浮かべようとしている。制御或いは創造というこの性向がある。部分的に我々はその制御の性向を持っているからです。しかし我々はこの性向は充分ではないと知るべきです。我々は物質的自然を制御するという性向がある、物質的自然に対して勢力を張るといふ。しかし我々は至上の制御者ではない。そのことはバガヴァッド・ギーターに説明されています。では、物質的自然とは何か？自然も説明されています。自然、物質的自然はバガヴァッド・ギーターにおいて、劣った、下位のprakṛtiとして。下位のprakṛti、そして生命体たちは優れた・上位のprakṛtiとして。Prakṛtiとは「制御されるもの」、…の下に…、Prakṛti、prakṛtiの実際の意味は「女性」です。夫が妻の活動を制御するように、同様に、prakṛtiもまた従属するものであり、優勢されるものです。主、至上主神が優勢者であり、そしてこのprakṛti、生命体たちも物質的自然も、異なるprakṛtiであり、主によって優勢される、制御されるものです。ですからバガヴァッド・ギーターによれば、生命体たちは至上主の本質的部分ではあるけれども、prakṛtiとして解されます。それは明確にバガヴァッド・ギーター7章で言及されており apareyam itas tu viddhi aparā (バガヴァッド・ギーター7章5節) この物質的自然はaparā iyam Itas tu そしてこれを超えて他のprakṛtiがある。そのprakṛtiとは何か？Jīva-bhūta、これら…、このprakṛti、このprakṛtiの構成・性質は3つの質により構成される。善良さのモード、激情のモード、無知のモード。そしてこれら3つのモード、3つの異なるモード、善良さ、激情、そしてつまり、無知、を越えて、永遠の時間があります。永遠の時間がある。自然のそれらのモードの組み合わせにより、制御の下、この永遠の時間の権限の下、諸活動がある。諸活動があり、karmaと呼ばれます。それらの諸活動は太古の昔から行われており、我々は自分の諸活動の諸結果・所産に苦しんだり或いはそれらを楽しんだりしているのです。

現在の生においてそうであるように、我々は活動を楽しみ、我々の活動の結果を楽しんでいます。私がビジネスマンで知性をもって非常に働き、銀行にたくさんの預金残高を蓄積しているとします。すると私は楽しむ者です。同様に、たくさんの資金を持ってビジネスを始め、しかし成功できなかった。お金を全て失った。すると私は苦しむ者です。同様に、我々の生のあらゆる分野で我々は楽しむ、我々の働きの結果を楽しみます。これがkarmaと呼ばれます。これらのこと、īśvara、jīva、prakṛti、すなわち至上主、生命体、物質的自然、永遠の時間、そして我々のさまざまな活動、これらのことがバガヴァッド・ギーターにおいて説明されています。これら5つのうち、主、生命体たち、物質的自然、時間、これら

4つの項目は永遠です。出現、prakṛtiの出現は一時的ではあるかもしれないが、しかし偽ではない。物質的自然のこの出現は偽であるという哲学者もおりますが、バガヴァッド・ギーターの哲学、ヴァイシュナヴァの哲学、によれば、世界の出現を偽とは取らない。世界の出現を現実である、が一時的なもの、と承知する。それは空に雲が現れて雨季が始まり、雨季の後にたくさんの新しい青々とした植物が一面に生えるのを見る。雨季が終わるや、雲が消える。普通、徐々に、この植物はみな枯れて再び土地は不毛の土地になる。同様に、この物質的出現は一定の間隔で起こります。我々はそれを理解する、それを知りましょう、バガヴァッド・ギーターの頁から Bhūtvā bhūtvā pralīyate ([バガヴァッド・ギーター8章19節](#)) この出現は一定の間隔で精密に素晴らしいものになり、そして再び消滅する。それがprakṛtiの働きです。しかしそれは永遠に働いている、故に prakṛtiは永遠です。それは偽ではない、なぜなら主が認めておられる mama prakṛti "我がprakṛti" ([バガヴァッド・ギーター7章5節](#)) Bhinnā prakṛti, bhinnā prakṛti, aparā prakṛti この物質的自然は至上主の分離したエネルギーであり、そして生命体たち、生命体たちもまた至上主のエネルギーですが、分離してはいない。永遠に関連している。ですから主、生命体、自然、物質的自然、そして時間、それらはみな永遠です。しかし他の項目、karma、は永遠ではない。karma、活動、の諸影響はとても古いでしょう。我々は太古の昔から我々の諸活動の結果に苦しんだり楽しんだりしており、しかしなお、我々は我々のkarma、活動、の結果を変えることができます。それは我々の完璧な知識に頼られます。疑いなく我々はさまざまな活動に従事している。しかし我々はどうのような活動を採用すべきか、を知らない。それが全活動の作用と反作用から我々を解放してくれる、どのような活動を探るべきか。それもまたバガヴァッド・ギーターに説明されています。īśvaraの立場は、至上の意識です。īśvaraすなわち至上主の立場、は至上の意識である。そしてjīvaたち、生命体たち、至上主の本質的部分であり、生命体も意識があります。一つの生命体もまた意識がある。生命体はprakṛtiとして説明される、エネルギーとして。そして物質的自然もまた prakṛtiとして説明される。しかしこの2つにおいて、一方の prakṛti、jīvaたち、には意識があります。もう一方のprakṛtiは意識はない。それが違います。故にjīva prakṛtiは優れた・上位のものと呼ばれる、jīvaは主と似た意識を持つからです。主は至上の意識である。一つのjīva、一つの生命体もまた至上の意識であると主張すべきではありません。そうではない。生命体はその完成のいかなる段階においても至上の意識あるものになることはできない。それは誤解させる理論です。それは誤解させる理論。しかし生命体には意識がある。それだけです。しかし至上の意識あるものではない。

至上の意識あるもの、それはバガヴァッド・ギーターの、jīvaとīśvaraの区別が説明される章で説明されます。Kṣetra-kṣetra-jña このkṣetra-jñaは、こう説明されました。主もまた kṣetra-jña、意識あるものであり、そしてjīvaたち、生命体たち、もまた意識あるものであると。しかし違いは、生命体は自分の限定された体の内部で意識があるのであり、しかし主は全ての体を意識する、という点です。īśvaraḥ sarva-bhūtānām hr̥d-deśe 'rjuna tiṣṭhati ([バガヴァッド・ギーター18章61節](#)) 主はあらゆる生命体の心の核に棲んでおられ、故に主は、個々のjīvaの心的動き、活動、を意識しておられます。我々は忘れてはならない。このことも説明されています。Paramātmā、至上主神、はīśvara、制御者、としてあらゆるものの心に棲んでおられ、主は指示を与えている、と。主は指示を与えている Sarvasya cāham hr̥di sanniviṣṭhaḥ ([バガヴァッド・ギーター15章15節](#)) あらゆるものの心に主は位置し、そして生命体が望むとおりに活動する指示を与えます。生命体は何をすべきか忘れていました。まず最初にあるやり方で活動すると決め、それから自分のkarmaの作用と反作用に巻き込まれる。しかし或る体のタイプを捨てた後、他の体のタイプへ入る・それはちょうど、或る種の服を脱ぎ、或るタイプの服、を他のタイプの服に着替えるように。同様に、バガヴァッド・ギーターにこう説明されています vāsāmsi jīṃṣāni yathā vihāy ([バガヴァッド・ギーター](#)

[2章22節](#)) 人がいろいろ衣服を取り替えるように、同様に生命体たちは、生命体たちもまたいろいろ体を取り替える。魂の転生、自分の過去の活動の作用と反作用をかぶりながら。こうした活動はその生命体が善良さのモード、正気・健全な状態、にあるときに変える事が可能です。こういった類の活動を探るべきかを理解し、そう行動すれば、過去の活動の作用と反作用全部が変えられる。故にkarmaは永遠ではありません。他のもの、他の4つ、5つ、Īśvara、jīva、prakṛti、kāla、karma、のうち、他の4つは永遠です。しかしkarma、karmaとして知られる項目は、それは永遠ではありません。それでは意識あるĪśvara、至上の意識あるものĪśvara 至上の意識あるものĪśvara、主、と、生命体との違いは現状、このようなものです。意識、主の意識も生命体たちの意識も両方とも、それら、この意識は超越的です。この物質の相互結合によりこの意識は生成される、というのではありません。それは誤った考えです。意識は物質の結合の状況の下に発達する、という理論は、バガヴァッド・ギーターでは認められておりません。物質の結合ではできない。意識は物質的諸状況の覆いにより歪んで反映されているかもしれない。色つきガラスを通った光線がその色に見えるように。同様に、主の意識、それは物質的に影響されない。クリシュナはこうおっしゃる mayādhyakṣeṇa prakṛtiḥ ([バガヴァッド・ギーター9章10節](#)) クリシュナがこの物質界に降下するとき、その意識は物質に影響されない。その意識が物質的に影響されていたとしたら、バガヴァッド・ギーターにおける超越的論題を語るに不資格だったはず。超越界については何一つ話すことはできない、物質的に汚染された意識から自由でなくしては。ですから主は物質的に汚染されてはいなかった。しかし我々の意識は、いま現在、物質的に汚染されています。ですから全て、バガヴァッド・ギーターの教えるように、我々は物質的に汚染された意識を浄化しなければならない。そしてその清浄な意識において、諸活動は為されるでしょう。それが我々を幸福にしてくれる。我々は止められない。我々は活動を止められない、諸活動を浄化することです。そうした浄化された活動がbhaktiと呼ばれます。bhaktiというのは、それは普通の活動にも一見見えますが、しかし汚染された活動ではありません。浄化された活動です。無知な人は献身者は普通の人のように働いていると見るかもしれませんが、知識の蓄積が少ししかない人は、知らないのです。献身者の諸活動、あるいは主の諸活動、それらは物質の不浄な意識に汚染されてはいない。3つのguṇa、自然の諸モード、の不浄に汚染されてはいない。超越的意識です。ですから我々の意識は物質的に汚染されている、我々は知るべきです。

そうして物質的に汚染されると、それは我々の条件付けられた段階と呼ばれます。条件付けられた段階。そして偽の自我、偽の意識・偽の意識は"私はこの物質的自然の生成物の一つである"という印象に表れます。それは偽の自我と呼ばれます。物質的活動の全部、([シュリーマド・バーガヴァタム10巻84章13節](#)) Yasyātma-buddhiḥ kuṇape tri-dhātuke 体の概念の思考に没頭する者 全バガヴァッド・ギーターは主により説明されました。なぜならアルジュナが体の概念の代理になったからです。生の体の概念から自由にならなければならない。それは超越主義者にとっての準備段階です。自由になりたい、解放されたい、と希む超越主義者にとって。まず第一に、自分はこの物質的体ではない、と学ばなければなりません。この意識、物質的意識・この物質的意識から自由になると、それはmuktiと呼ばれます。Muktiすなわち解放、の意味は、物質的意識から自由になること。シュリーマド・バーガヴァタムにおいても解放の定義が述べられています ([シュリーマド・バーガヴァタム2巻10章6節](#)) Svarūpeṇa vyavasthitiḥ Muktiとは、この物質界の汚染された意識からの解放、清浄な意識に位置する、という意味である。そして全ての教え、バガヴァッド・ギーターの教授の全ては、その清浄な意識を目覚めさせることを目的とする。我々はバガヴァッド・ギーターの教授の最終段階で見ることになります。クリシュナはアルジュナに問う、今や君は浄化されし意識にあるや、と。浄化された意識にあるかどうかと。浄化された意識は主

の指示に一致して活動するものです。それが浄化された意識です。それが浄化された意識の要点の全てです。意識はすでにそこにある、我々は(主の)本質的部分であるからですし我々は影響を受ける。物質的諸モードに影響されるという親和性があるのです。しかし主は至上なるものであり、決して影響されない。主は影響されることはない。これが相違点です。主、至上なるもの、…至上主と…ではこの意識とは…この意識とは何か? この意識とは"私はxである"です。私とは何か? 汚染された意識においては、この"私は"は"私は見渡す全てのものの主人である"を意味します。これが不浄な意識です。そして"私は享樂者である"。全物質界はあらゆる生命体が、"私がこの物質界の主であり創造者である"と考えて動きます。意識には2つの心的運動、2つの心的区分、があります。1つは"私は創造者である"、もう1つは"私は享樂者である"。至上主が実際には創造者であり、至上主が実際には享樂者です。生命体たちは、至上主の本質的部分であり、生命体は実際には創造者や享樂者ではなく、生命体は協力者です。機械と同じようなもので、機械の部品は協力するものです。協働する者。我々の体の構成を見てみてもよいでしょう。手があり脚があり眼があり、そういった器官全てが、働いている。がそれら体の部分は、享樂者ではない、胃が享樂者です。脚は場所から場所へ移動する。手は集める、食物を準備する。歯が噛んだり、体の全ての部分は、胃を満たすため働く。この体の組織にあっては胃が重要な器官だからです。全ては胃に与えられなければならない。(シュリーマド・バーガヴァタム4巻31章14節) 根に水をやると木が青々とするように。健康に…、体の部分、手、脚、眼、耳、指、全てが健康でいられる。体の部分が胃に協力すれば。同様に、至上なる生物、主、主が享樂者です。主が享樂者であり主が創造者である。そして我々は、つまり、従属する生物たち、至上主のエネルギーの産物たち、我々は主に協力するためにある。この協力が助けになります。例えば、指が良い食物を取る。指が"なぜ胃にやらなければならない? 自分で食べよう"と思うならそれは誤りです。指は楽しむことはできない。指がその特定の食物の楽しみの成果を望むなら、指はそれを胃に入れなければならない。

ですから全ての取り決めは中心人物、創造の中心人物、享樂の中心人物、は至上主であり、生命体たち、彼らは単純に協力者である、ということです。協力により、協力することで生命体たちは楽しむ。ちょうど主従関係に似ています。主人が満足すれば、主人が十分に満足すれば、従者たちはおのずと満たされます。それが法則です。同様に、至上主が満足せられるべきであり、創造者になる性向とこの物質界を享樂する性向があるにしてもです。それらは生命体たちの内にもあります。なぜなら至上主の内にあるから。至上主が創造なされた。至上主が発現宇宙界を創造なされた。故に我々はこのバガヴァッド・ギーターに見出すことでしょう。完全な全体、至上の制御者、制御される生命体たち、宇宙発現、永遠の時間、諸活動、を包含する、その全てが完全に説明されていることを。完全に総合したその全体が絶対真実と呼ばれます。完全なる全体、至上絶対真実、は故に完全な至上主神格シュリー・クリシュナです。私が説明しましたように、発現は主の異なる諸エネルギーによるものであり、そして主が完全な全体です。非人格ブラフマンはバガヴァッド・ギーターにおいてこう説明されます。非人格ブラフマンもまた完全な人物に従属するものであると。Brahmaṇo 'haṁ pratiṣṭhā (バガヴァッド・ギーター14章27節) 非人格ブラフマンもまた。それは…非人格ブラフマンはブラフマ-ストトラにおいてより明瞭に、光線として解説されています。太陽の、太陽の輝きの光線のように。同様に、非人格ブラフマンは輝く放射光線です。至上なるブラフマン、すなわち至上主神格、の。故に非人格ブラフマンは、絶対完全全体の不完全な認識です。そしてまたパラマートマーの概念の不完全な認識です。これらのことも説明されています。Puruṣottama-yoga Puruṣottama-yogaの章を読むとき、至上なる人物、Puruṣottama、は、非人格ブラフマンと、パラマートマーの部分的認識とを越えることがわかるでしょう。至上主神格はこう呼ばれます sac-cid-ānanda-vigrahaḥ (ブ

ラフマ-サンヒター5章1節) ブラフマ-サンヒターにおいてそれはこう始まります *Ísvarah paramaḥ kṛṣṇaḥ sac-cid-ānanda-vigrahaḥ/ anādir ādir govindaḥ sarva-kāraṇa-kāraṇam* (ブラフマ-サンヒター5章1節) "ゴーヴィンダ、クリシュナ、は全原因の原因 その原初の主なり" 至上主神格は *sac-cid-ānanda-vigrahaḥ* 非人格ブラフマン認識は主の *sac* 部分、永遠性、の認識です。そしてパラマートマー認識は *sat-cit*、永遠なる知識の部分の認識。しかしクリシュナとしての主神格の認識は、全ての超越的特徴 *sat* と *cit* と *ānanda*、完全な *vigraha* についての認識です。 *Vigraha* とは「形態」の意味です。 *Vigraha* とは「形態」の意味。 *Avyaktam vyaktim āpannam manyante mām abuddhayaḥ* ([バガヴァッド・ギーター7章24節](#)) 知性に乏しい人々は至上真実を非人格と考える。しかし至上真実、それは人物、一人の超越的人物、である。このことは全ヴェーダ文献において確証されています。 *Nityo nityānām cetanaś cetanānām* (カタ・ウパニシャッド2.2.13) 我々もまた人物、個々の生物、であり、我々は人々で、自らの個別性を持ち、我々は皆個々です。同様に、至上真実、至上絶対、も究極的には人物です。主神格の認識は全ての超越的特徴 *sat* と *cit* と *ānanda*、完全な *vigraha* についての認識です。 *Vigraha* とは「形態」の意味です。故に完全な全体は無形ではない。もし主が無形であるなら、もしくは何かに欠けているなら、完全な全体ではありえません。完全な全体は我々の経験にある全てそして我々の経験を超えた全てを持つはずで、なければ完全ではありえない。完全な全体である主神格は限りない潜在力を持ちます ([チャイタンニャチャリタームリタ マディヤリラ13章65解説](#)) それはバガヴァッド・ギーターにおいても説明されています。異なる潜在力において、どう主は活動なされるか。この現象界、物質界、我々が現在入れられている物質界もそれ自身で完全です。なぜなら *pūrṇam idam* (シュリー・イーシャ-ウパニシャッド 祈念) 24要素、サーンキヤ哲学によるとこの物質宇宙は24要素で構成される一時的発現であり、その24要素は、この宇宙の維持と存続に必要な物を完全に産出するよう完全に調整されている。宇宙の維持に他のユニットによる外部からの努力は必要ない。宇宙は独自の時間があり、それは完全な全体のエネルギーにより定められている。そして時間が完結すると、それら一時的諸発現は完全なるものの完全な取り決めにより破壊されます。

小さな完全単位、すなわち生命体たち、には完全なるものを認識するための完全な便宜がはかられています。そしてあらゆる種類の不完全さは、完全なるものについての不完全な知識のために経験されます。バガヴァッド・ギーターはヴェーダの叡智の完全な知識です。ヴェーダ知識全体が絶対に誤りのないものです。いかに我々がヴェーダ知識を絶対に誤りのないものとするかさまたまな例があります。たとえばヒンドゥー教徒に限ってみれば、いかに彼らがヴェーダ知識を完全とみなすか、些細な例ではありますが、たとえば牛糞。牛糞は動物の排泄物です。スムリティ、ヴェーダの叡智、によれば、動物の排泄物に触ったら、清めのために沐浴しなければなりません。しかしヴェーダ諸経典には牛糞は清浄であるとされています。むしろ、不浄な場所や不浄な物は牛糞が触れることで浄化される、と。一方では動物の排泄物は不浄であると言われているのに、他方では同じ動物の排泄物である牛糞が清浄であると言われる、矛盾している、と論ずるかもしれませんが、しかし事実、矛盾するようには見えませんが、しかしそれがヴェーダの命ずるところなので、故に実際的な目的のために我々はそれを承知します。そしてその受容の為、我々は間違いをおかしていない。現代化学者や、現代科学、ラル・モハン・ゴサイ博士は、牛糞を精密に分析し、牛糞にはあらゆる防腐性物質が配合されていることを発見しました。同様に博士は好奇心からガンジス川の水を分析してもおられます。ですから私の考えは、ヴェーダ知識は完全である、なぜならそれは全ての疑念と全ての誤りを越えている。そしてバガヴァッド・ギーターは全ヴェーダ知識の精髓です。ヴェーダ知識は故に絶対に誤りのないもの、完璧な師弟継承を通じて降り来たるものです。故にヴェーダ知識は研究調査の問題ではありません。

我々の調査は不十分です。なぜなら我々は全てを不十分な諸感覚で調査しているからです。故に我々の調査結果も不十分です。完璧にはなりえない。我々は完璧な知識を受け取る必要があります。完璧な知識は降り来るもの、バガヴァッド・ギーターで述べられているように、ちょうど我々がそう始めたように *evam paramparā-prāptam imam rājarṣayo viduḥ* (バガヴァッド・ギーター4章2節) 我々は知識を正しいソースから、主御自身から始まる精神の師の師弟継承において授かる必要があります。バガヴァッド・ギーターは主御自身により語られております。そしてアルジュナ、つまりバガヴァッド・ギーターのレッスンを受けた生徒は、お話を全てをそのままに受け取りました。何も編集せずに。それは許可されません、バガヴァッド・ギーターの特定の部分を受け取り他の部分は拒否するというのも、そういうことも認められません。我々はバガヴァッド・ギーターを受け取らなければならない、解釈なしに、何も編集せず。また自分で気まぐれに論題へ参入などせず。なぜならそれは最も完璧なヴェーダ知識として受け取られるべきだからです。ヴェーダ知識は超越的な源たちから授かる、なぜならその最初の言葉は主御自身により語られたものだから。主によって語られた言葉は *apauruṣeya* と呼ばれます。俗界の誰によってももたらされたものではない、不十分さの4つの素因に汚染された誰か。俗界の生命体はその生の4つの欠陥素因を持ちます 1) 間違いをおかす 2) 幻惑されることがある 3) 他者を欺こうとする 4) 不十分な諸感覚が賦与されている 不十分さ・欠陥のこれら4つの素因全てがあるため、全充滿する知識に関する情報を完璧な形で伝えることはできない。ヴェーダとはそのようなものではありません。ヴェーダ知識はブラフマーの心に分け与えられました、最初に創造された生命体ブラフマーの心に。そしてブラフマーの番で、ブラフマーは息子たちと弟子たちにその知識を撒布しました。初めに主から受け取ったそのままに。

主は、*pūrṇam* すなわち全完璧であり、物質的自然の法則をこうむることになるということはありません。故に知性を持って知るべきです。主を除き、誰も宇宙内の物の所有者ではない、と。バガヴァッド・ギーターに説明されています (バガヴァッド・ギーター10章8節) (バガヴァッド・ギーター10章8節) 主は太源の創造者です。主はブラフマーの創造者です、主が創造者…それも説明されています。主はブラフマーの創造者である。11章において主は *prapitāmaha* と呼称されています (バガヴァッド・ギーター11章39節) なぜならブラフマーは *pitāmaha*、祖父(祖先)、と呼ばれ、主は祖父の創造者でもあるからです。ですから自分が何かの所有者であると主張するべきではありません。維持の割り当てとして主が取っておいてくださる物を受け取らなければなりません。どのように我々は主からの分配分を使用する必要があるか、多くの例があります。それもバガヴァッド・ギーターに説明されています。アルジュナ、彼は最初、戦わないと決心しました。それが彼自身の所存でした。アルジュナは主に言いました。王国を享受することなど自分には不可能だ、自分の親族を殺した後に、と。そしてその視点は彼の、体の概念によるものでした。彼は体が彼自身と考えており、体の親戚、彼の兄弟、彼の従兄弟たち、彼の義父、彼の祖父、彼らは彼の体の拡張・伸張、と、彼の身体的要求を満たす考え方で考えておりました。そしてその視点を変えるために全ては主によって語られた。そしてアルジュナは主の指示の下に働くことに同意した。アルジュナは言いました *kariṣye vacanam tava* (バガヴァッド・ギーター18章73節) 故にこの世界で人間は犬や猫のように争うためのものではありません。知性もて、人間の生の重要性を認識し、普通の動物のように活動することを拒否しなければなりません。そうすべきです…人間は人間の生の目標を認識すべきです。この方針は全ヴェーダ文献において与えられており、その精髓はバガヴァッド・ギーター中に与えられております。ヴェーダ文献は人間のためのものであり猫や犬のためのものではありません。猫や犬は食べるための動物を殺すことができ、彼ら自身に疑いなく罪はありません。しかし人間が自分の制御されない味覚の満足のために動物を殺すなら、自然の法則をやぶる責を負わなくてはなりません

ん。バガヴァッド・ギーターには明確に説明されています。3種類の活動がある、自然の異なるモードにより: 善良さの諸活動、激情の諸活動、無知の諸活動。同様に、食べ物も3種類: 善良さにある食べ物、激情での食べ物、無知での食べ物。それらはみな明確に述べられており、我々がバガヴァッド・ギーターの教授を適正に使用すれば、我々の生全体は浄化され、そして究極的に目的地に到達することができるでしょう Yad gatvā na nivartante tad dhāma paramam mama ([バガヴァッド・ギーター15章6節](#)) その情報はバガヴァッド・ギーターにおいて与えられています。この物質の天空skyを越えて、精神的天空があります。それはsanātana天空と呼ばれます。この天空では、この覆われた天空では、我々はあらゆるものを一時的であると発見します。それは発現し、一定時間の間留まり、我々に副産物を与え、そして収縮しはじめ、消滅します。それがこの物質界の法則です。あなたはこの体を取り、ここで創られた成果か何でもを取り、最後に帰滅を迎える。この一時的世界を越えて、別の世界があります。そのための情報があります paras tasmāt tu bhāvaḥ anyah ([バガヴァッド・ギーター8章20節](#)) 別の自然がある。それは永遠、sanātana、永遠です。そしてjīva、jīvaもまたsanātanaとして述べられている Mamaivāṁśo jīva-bhūtaḥ jīva-loke sanātanaḥ ([バガヴァッド・ギーター15章7節](#)) Sanātana、sanātanaとは「永遠」の意味です。そして11章に、主もまたsanātanaとして述べられています。ですから我々は主と親密な関係を得ており、我々はみな質的に一つ・sanātana-dhama (永遠の住処)とsanātanaなる至上人格とsanātanaである生命体たち、みな同じ質的平面・水準にあります。故にバガヴァッド・ギーターの全 目的は我々のsanātanaな職業を甦らせること。sanātana、それはsanātana-dharma、生命体の永遠の職業、と呼ばれます。我々は今一時的に異なる諸活動に従事しており、それらの活動は全て浄化されます。それらの一時的活動を全て放棄するとき sarva-dharmān parityajya ([バガヴァッド・ギーター18章66節](#)) 至上主の欲されるとおりに諸活動にとりかかるとき、それが我々の清浄な生と呼ばれます。

Part 2.

2月20日

故に、sanātana-dharma、先に申しましたように、至上主はsanātana。そして超越的住処、それは精神的天空を越えており、それもまた sanātana。そして生命体たち、彼らもまた sanātana。sanātanaなる至上主との交際、sanātanaである生命体たち、sanātanaな永遠なる住処における、それが人間という形態の生の究極目標です。主は生命体たちに対しいへん親切です。なぜなら生命体たちはみな至上主の息子たちであるとされるからです。主は宣言されます sarva-yoniṣu kaunteya sambhavanti mūrtayo yāḥ ([バガヴァッド・ギーター14章4節](#)) 全ての生き物、生命体の全てのタイプ・自身の異なるkarmaにより、生命体たちにはさまざまに異なるタイプがあります。しかし主は断言なさる、"我は全生命体の父"、と。そして故に主は降下する、それら忘れて条件付けられた魂たちを全て取り戻すため sanātana-dhāma、sanātanaなる天空、へ取り戻すため sanātanaである生命体が、主との永遠の交際におけるそのsanātanaな立場に再び復帰できるように。主はさまざまに異なる化身として御自身で来る、内密な従僕を息子たち、交際者たち、アーチャーリヤたち、として送る。条件付けられた魂たちを取り戻すために。故にsanātana-dharma は宗教のどれかの宗派の方法を意味しません。それは永遠である生命体たちの永遠の機能・役割です、永遠なる至上主との関係における。sanātana-dharmaに関する限り、それは永遠なる職務を意味します。シュリーパーダ・ラーマヌージャチャーリヤはsanātanaという語をこう説明しました "いかなる始まりもいかなる終わりもないもの" 我々はsanātana-dharmaについて話すとき、勿論認めなくてはなりません、シュリーパーダ・ラーマヌージャチャーリヤ

ヤの權威にのっとり、"始まりもなく終わりもないもの"と。宗教religionという語は、sanātana-dharmaとは少し違います。宗教は信念という概念を伝達します。信念は変わります。或る特定の方法に信念を置き、後に信念を変え、他の信念を採用するかもしれません。しかし、sanātana-dharmaとは、"変えられないもの"を意味します。変え得ないもの。ちょうど水と流動性に似て。流動性は水から変更させられません。熱と火。熱は火から変更させられない。同様に、永遠である生命体の永遠の機能・役割、それがsanātana-dharmaとして知られるものですが、それは変えられない。変えることは可能ではない。我々は、永遠である生命体のその永遠の機能・役割とは何かを見出す必要があります。我々はsanātana-dharmaについて話すとき、故に、勿論認めなくてはなりません、シュリーパーダ・ラーマヌージャチャーリヤの權威にのっとり、"始まりもなく終わりもないもの"と。終わりがなく、始まりがない、もの。それは何かの宗派的なものではなく、いかなる境界によっても限られないはずであります。sanātana-dharmaについて協議を持つと、非永遠の宗教信念に属する人々が、誤って考えることもあるかもしれません。我々が何かの宗派に関係していると。しかし論題に深く潜り行き、現代科学の光の中に全てを持ち来れば、sanātana-dharmaを仕事として見るようになるでしょう。世界中全ての人々の仕事、いいえ、宇宙の全ての生命体たちの仕事として。非sanātanaの宗教信念は人間社会の年史において或る始まりを持つでしょう。しかしsanātana-dharmaにはどんな歴史もありえません。なぜならそれは生命体たちの歴史と共に留まり続けるからです。生命体たちに限れば、諸śāstra (論学)の權威からわかります、生命体たちもまた誕生も死も持たない、と。バガヴァッド・ギーターに明確に述べられています。生命体は生まれず、死ぬこともない。生命体は永遠であり、破壊できない、一時的な物質の体の破壊の後も生き続ける。

sanātana-dharmaという先の概念に関して、サンスクリットdharmaという語の語根から宗教religionの概念を理解できるでしょう。それは「特定の対象と常にあるもの」を意味します。既に述べましたように、我々が火について話すとき同時に火に伴う熱と光が推断されます。熱や光なくして「火」という語は意味をなしません。同様に、生物に常に伴うところの本質的・根本的部分を見い出さなくてはなりません。生物の不変の連れ立ちというその部分が生物の永遠の質であり、生物の質の永遠である部分が生物の永遠の宗教religionです。サナータナ・ゴスワミが主シュリー・チャイタンニャ・マハープラブにsvarūpaについて問うたとき、-我々は既にあらゆる生物のsvarūpaについて論じました - svarūpaすなわち生物の本当の構成 (real constitution)について。主は答えました、生物の本質的 (constitutional)な立場は至上主神格への奉仕に従事することである、と。主チャイタンニャの声明のこの部分を分析すると、あらゆる生物は常に仕事についているということがよくわかります。別の生物への奉仕という仕事に。一つの生物は別の生物に異なる資格・能力で奉仕します。そしてそうすることで生命体は生を楽しんでいる。下級の動物は人間に奉仕し、召使は主人に奉仕し AはB主人に奉仕しBはC主人に奉仕しCはD主人に奉仕し、と続きます。こういう状況ですから、友人は別の友人に奉仕し、母は息子に、妻は夫に、夫は妻に、奉仕しているとわかります。その精神で調べ続ければ、生物の社会において、例外なく無いということがわかるでしょう、奉仕という活動を見い出さない場所は。政治家は公衆に政治声明を発表し、有権者に自分の奉仕能力を納得させます。有権者は政治家に貴重な一票を投じます、政治家が社会に奉仕するだろうという期待に沿って。店主は顧客に奉仕し、職工は資本家に奉仕します。資本家は自分の家族に奉仕し、家族は永遠の存在の永遠の能力を使って首長に奉仕します。このように、免除される生物は無い、とわかります。別の生物への奉仕という実践から免除される生物は。故に結論できます、奉仕は生物の不変の連れ立ちである。故に結論して差し支えない、生物が奉仕に従事するという事は、生物

の永遠の宗教religionである。人が或る特定の型の信念に属すると公言するとき、誕生の特定の時や状況に関連してです、こうしてヒンドゥー教徒、イスラム教徒、キリスト教徒、仏教徒、他何かの宗徒、亜派、であるといえます。そのような名称は非sanātana-dharmaです。ヒンドゥー教徒は信念を変えてイスラム教徒になるかもしれませんが、イスラム教徒は信念を変えてヒンドゥー教徒やキリスト教徒になるかもしれません。しかし全ての状況において、そうした宗教的信念の変更は、別の生物へ奉仕するというその人の永遠の用務を変えることにはなりません。ヒンドゥー教徒であろうとイスラム教徒であろうとキリスト教徒であろうと全ての状況下で、その人は誰かに奉仕するのであり、ですから或る特定の型の信念を信奉すると言うことは、sanātana-dharmaとは考えられません。生物の不変の連れ立ち、それは、奉仕に従事すること、がsanātana-dharmaです。実際、我々は至上主と奉仕の関係において結ばれています。至上主は至上なる享樂者、そして我々生命体たちは永遠に主の至上のしもべ。我々は主の享樂のために創造され、我々が至上主神格と永遠なる享樂を共に、それにあずかるならば、それが我々を幸福にする。他の方法はしません。別個に、既に説明しましたとおり、別個には、体のどの部分も、手、足、指、体のどの部分も、別個には、幸福にはなれません。胃との協力なくしては。同様に、生命体は決して幸福にはなれない、至上主へ超越的な愛のこもった奉仕をすることなくしては。バガヴァッド・ギーターにおいてさまざまな半神の崇拜は是認されていません。是認されていない、なぜなら、[バガヴァッド・ギーター7章20節](#)に言われております、主は言われる kāmāis tais tair hṛta-jñānāḥ prapadyante 'nya-devatāḥ。Kāmāis tais tair hṛta-jñānāḥ 物質的な欲望に歪んだ者たち、ただ彼らは半神たちを崇拜する、至上主、クリシュナ、ではなく。

我々はまた覚えておきましょう、"Kṛṣṇa"について話すときそれは宗派的な名前ではないことを。名"Kṛṣṇa"は"最高の歓喜"を意味します。確証されております、至上主は至上なる貯蔵、全ての喜びの宝庫、であると。我々はみな喜びを切望しています Ānandamayo 'bhyāsāt (ヴェダーンタ-スートラ 1.1.12) 生命体たち、或いは主は、なぜなら我々は意識に満ち、故に我々の意識は幸福を追い求めている。幸福。主もまた永久に幸福であり、我々が主と交際すれば、主と協力すれば、主との交際に参加すれば、我々もまた幸福になる。主はこの現し世に降下します、ヴリンダーヴァンで幸福に満ちた娯楽を示すため。主シュリー・クリシュナがヴリンダーヴァンにおられたとき、彼の牛飼いの友人である少年たちや、少女たち、友人たち、友人である少女たち、ヴリンダーヴァンの住民たち、と為す諸活動、そして少年時代の牛飼いという仕事、主クリシュナのそれら全ての娯楽は幸福に満ちていました。ヴリンダーヴァン全体、ヴリンダーヴァンの全住民がクリシュナを追いかけました。彼らはクリシュナ以外知らなかった。それでも主クリシュナは彼の父ナンダ・マハーラージャの半神インドラ崇拜を禁じました。至上主神格以外、人々はいかなる半神も崇拜する必要はないと確立することを欲したからです。なぜなら生の究極目標は至上主の住処へと帰還すること。主クリシュナの住処は[バガヴァッド・ギーター15章6節](#)に述べられています ([バガヴァッド・ギーター15章6節](#)) ([バガヴァッド・ギーター15章6節](#)) その永遠なる天空の記述。我々が天空について話すとき、我々は天空の物質的概念をもっているため、天空を太陽や月や星々やそうしたものとともに考えます。しかし主は言う。永遠なる天空、太陽の必要なし、と Na tad bhāsayate sūryo na śāśānko na pāvakaḥ ([バガヴァッド・ギーター15章6節](#)) 永遠なる天空においては月の必要もない Na pāvakaḥは照明するために電気や火は必要ない、という意味です。なぜなら精神的天空は既にbrahmajyotiにより照明されているからです。Brahmajyoti, yasya prabhā (ブラフマー-サンヒター 5.40) 至上なる住処の光線 人々が他の惑星へ到達しようとしている現代では、至上主の住処を理解することはさほど難しくはありません。至上主の住処は精神的天空中にあり、ゴーロカと名づけられています。ブラフマー-サンヒターにたいへん良く述べられています goloka eva nivasaty

akhilātma-bhūtaḥ (ブラフマー-サンヒター 5.37) 主は、永遠に彼の住処、ゴーロカ、に住んでおられるけれども、それでもなおakhilātma-bhūtaḥ ここからもまた彼に接近することが可能である。そして主はその真の形態、sac-cid-ānanda-vigraha (ブラフマー-サンヒター 5.1) を明示するために来られる。我々が想像する必要がないようにです。想像という問題はない。

主がいること、謂れなき慈悲により主はそのŚyāmasundara-rūpaでの御自身を現されます。不運にも、知性に劣る人々は主を嘲笑します Avajānanti mām mūḍhā (バガヴァッド・ギーター9章11節) 主が我々の一人として来られ、一人の人間として我々と遊ばれたからと、主が我々の一人であると考えする必要はありません。主の全能・無限の力が、我々の前にその真実の形態・姿で御自身を現し、その住処での原型として、その娯楽を示すのです。主のその住処、そのbrahmajyotiの中には無数の惑星もまたあります。太陽光線の中に無数の惑星が浮かんでいるように。同様に、brahmajyoti 至上主の住処、クリシュナロカ、ゴーロカ、から放射する光線、の中に ānanda-cinmaya-rasa-pratibhāvitābhis (ブラフマ-サンヒター 5.37) それらの惑星は全て精神的な惑星です。それらはānanda-cinmaya、それらは物質的な惑星ではない。主は言われる (バガヴァッド・ギーター15章6節) (バガヴァッド・ギーター15章6節) その精神的天空に到達できるならば誰でも、この物質的天空へ再び戻る必要はなくなります。物質的天空にいる限り、月への到達はいうまでもなく、月はもちろん最も近い惑星です、しかし最高の惑星ブラフマロカに到達したとしても、我々は物質的生の同じ惨めさをもちます。つまり誕生、死、老年、病気、という惨めさです。物質宇宙のどの惑星も物質的存在の4原則から自由ではありません。故に主はバガヴァッド・ギーターで言われる ābrahma-bhuvanāl lokāḥ punar āvartino 'rjuna (バガヴァッド・ギーター8章16節) 生命体たちは惑星から惑星へ旅をしています。スプートニクという機械装置で別の惑星へ我々は行けるというわけではありません。他の惑星へ行きたいと欲するなら、方法があります Yānti deva-vratā devān pitṛn yānti pitṛ-vratāḥ (バガヴァッド・ギーター9章25節) 他の惑星へ行きたいのなら、たとえば月へ、スプートニクで行こうとする必要はありません。バガヴァッド・ギーターは我々に指示します yānti deva-vratā devān 月たちや太陽たち、このブーロカを超えた諸惑星、それらはスヴァルガロカと呼ばれます。スヴァルガロカ。ブーロカ、ブヴァルロカ、スヴァルガロカ。諸惑星には異なる状態・位階があります。デーヴァロカ、それらはこのように知られています。バガヴァッド・ギーターはたいへん単純な方式を与えます。高位の諸惑星、デーヴァロカ、に行くための Yānti deva-vratā devān Yānti deva-vratā devān Deva-vratā 特定の半神崇拝を実践するなら、我々はその特定の惑星に行くことができます。太陽にすら行けますし、月にも行ける、天国の惑星にも行ける。しかしバガヴァッド・ギーターは、物質界のそれらの惑星のどれにも行くことを薦めません。なぜならたとえブラフマロカ、最高の惑星、現代科学者の計算ではスプートニクで4万年旅をすると最高の惑星に到達するとのことですが、4万年生きてこの物質宇宙の最高惑星に到達することは不可能です。しかし特定の半神崇拝に一生を捧げれば特定の惑星に到達できます。バガヴァッド・ギーターに述べられております yānti deva-vratā devān pitṛn yānti pitṛ-vratāḥ (バガヴァッド・ギーター9章25節) 同様にピトゥリロカがあります。同様に、至上の惑星に到達することを望むなら、至上の惑星・至上の惑星とはクリシュナロカを意味します。精神的天空の中に無数の惑星があります、sanātana諸惑星、永遠の諸惑星。破壊されること、滅することは決してない。しかしそれら全精神的惑星中に一つの惑星があります。太源の惑星、その惑星はゴーロカ・ヴリンダーヴァンと呼ばれます。こうした情報はバガヴァッド・ギーターにあり、我々には機会が与えられています。この物質界を離れ永遠の王国で永遠の生を得る、という。

バガヴァッド・ギーター15章に、物質界の本当の全体像が述べられています ([バガヴァッド・ギーター15章1節](#)) ([バガヴァッド・ギーター15章1節](#)) この物質界はバガヴァッド・ギーター15章に、根が上向きの木、ūrdhva-mūlamとして述べられています。根が上向きの木を見たことがおありですか？我々は反映でこの根が上向きの木を見ています。川岸や貯水池のわきなどに立つと、水辺の木が水に映って幹は下向きに、根は上向きに、見えます。この物質界は実際、精神界の反映です。水辺の木の反映が下向きに見えるように、同様に、この物質界は、影と呼ばれます。影。影の中にあるのでどんな実在性もありえません。しかし同時に、影から、実在性があるということを理解できます。たとえば影、砂漠における水の影は、砂漠に水がなくても、水がある、ということを示唆します。同様に、精神界の反映において、すなわちこの物質界では、疑いなく、幸福はない、水はないのです。しかし本当の水、すなわち現実の幸福、が精神界にあります。主は、精神界へ到着しなければならぬと言われる、次の方法、nirmāna-mohāで ([バガヴァッド・ギーター15章5節](#)) ([バガヴァッド・ギーター15章5節](#)) そのpadam avyayam、その永遠の王国、にnirmāna-mohāである人が到着できます。Nirmāna-mohā。Nirmānaは「我々は称号を求めている」という意味です。人為的に、我々は称号をほしがります。「サー」になりたい人、首長になりたい人、大統領になりたい、富豪になりたい、王になりたい、こうした称号は全て、我々がこうした称号に執着を持つ限り・なぜならこうした称号は全て体に属するからです。我々はこの体ではない。これが精神的認識の最初の概念です。称号に惹かれない人。そしてjita-saṅga-doṣā, saṅga-doṣā 今我々は物質的諸性質の3つのモードに関わっており、主への献身奉仕によって離れることができれば・主への献身奉仕に惹かれない限り、我々は物質的自然の3つのモードから離れることはできません。故に主は言われる vinivṛtta-kāmāḥ これらの称号、これらの執着は、我々の欲、欲望によるもの。我々は物質的自然に勢力を張りたく欲する。物質的自然に勢力を張るといふこの性癖を捨てない限り、その時まで至上者の王国、sanātana-dhāma、へ帰還の可能性はありません ([バガヴァッド・ギーター15章5節](#)) その永遠の王国、それはこの物質界のように破壊されることは決してない、そこへはamūḍhāḥにより到達することができます。Amūḍhāḥは「惑わされない」という意味です。この偽りの享楽への誘引に惑わされない者、そして主への至上の奉仕に確固とする者、それがその永遠の王国に到達するにふさわしい人です。そしてその永遠の王国は月も太陽も電気も必要としません。それが永遠の王国に到達することのおぼろげな理解です。

バガヴァッド・ギーターの別の箇所でもまたこういわれています ([バガヴァッド・ギーター8章21節](#)) ([バガヴァッド・ギーター8章21節](#)) Avyaktaは「出現していない」の意味です。物質界の部分ですら我々の前には出現していません。我々の感覚はあまりにも不完全であり、この物質宇宙に何個の星があるか、何個の惑星があるか、も見ることができません。もちろん、ヴェーダ諸文献を通して我々は全ての惑星の情報を得る。信じようと信じまいと、我々に関連する重要な惑星全て、それらはヴェーダ文献に記述されております。特にシュリーマド・バーガヴァタム中に。しかし精神界、それはこの物質的 天空を超えるものです、paras tasmāt tu bhāvo 'nyo ([バガヴァッド・ギーター8章20節](#)) が、そのavyakta、その出現していない精神的天空、がparamām gatim、それが、人が欲すべきもの、人はその至上の王国へ至ることを切望すべきです。そしてひとたびその至上の王国へ到達すれば、yam prāpya、その至上の王国に到達する或いは成就すれば na nivartante、この物質界へ戻る必要はない。そして主の永遠の住処であるその場所、そこから我々は戻る必要はない、それが我々の、それが我々の・であるべき(中断)一つの問いが生じてくるでしょう。主の至上の住処へ到達する方法とは何か、と。それもバガヴァッド・ギーターに記述されています、8章5、6、7、8節に。至上主、至上主の住処、に到達するプロセスも、そこに示されています ([バガヴァッド・ギーター8章5節](#)) ([バガヴァッド・ギーター8章5節](#)) Anta-kāle、生の

終わりに、死の時に Anta-kāle ca mām eva クリシュナを思う者、smaran、もし彼が思い出せるなら。死なんとする人物、死の時に、もしクリシュナの姿を思い出すなら。そのように思い出している間に、現在の体を去るなら、そうすれば確実に精神的王国へ到達する、mad-bhāvam Bhāvamは「精神的自然」の意味です Yaḥ prayāti sa mad-bhāvam yāti Mad-bhāvamはちょうど、「自然」すなわち「至上存在の超越的自然」。先に述べましたように、至上主はsac-cid-ānanda- vigraha (ブラフマ-サンヒター5.1) 主はその形態・姿を有する、しかしその形態は永遠である、sat。知識に満ちている、cit。至福に満ちている、ānanda。我々の現在の体を比べてみましょう。この体はsac-cid-ānandaであるか。違う。この体はasat。satであるかわりにasatです。Antavanta ime dehā ([バガヴァッド・ギーター2章18節](#)) バガヴァッド・ギーターは言う、この体はantavat、滅びる。そして・Sac-cid-ānanda。satになるかわりに、それはasat、正反対です。そしてcit、知識に満ちる、になるかわりに、それは無知に満ちている。我々は精神的王国についての知識なく、この物質界についての完璧な知識も持たない。たくさんものを我々は知らない。故にこの体は無知です。知識に満ちる、になるかわり、それは無知。体は滅ぶ、無知に満ち、そしてnirānanda。至福に満ちる、になるかわり、それは苦しみに満ちている。我々がこの物質界で経験する苦しみの全て、それは全てこの体の為です。

主は言われる anta-kāle ca mām eva smaran muktvā kalevaram ([バガヴァッド・ギーター8章5節](#)) この物質的体を去る、ただ主クリシュナ、至上主神格、を思い出すことにより、その人はただちにsac-cid-ānanda-vigraha (ブラフマ-サンヒター5.1) の精神的体を得る。物質界でこの体を去り他の体を得るプロセスもまた組織化されています。次の生で持つ体の形態が決められた後に人は死にます。しかしそれは高次の権威により決められます。我々の奉仕に応じて、我々は昇格あるいは降格します。同様に、我々の諸行為に応じて我々は・この生での諸行為、この生での諸活動は次の生への準備です。我々は次の生の準備をしているのです。この生での活動によって。ですから神の王国への昇格を得るために、我々のこの生を準備できれば、そうすれば確実に、離れた後、この物質の体を去った後、・主は言われる yaḥ prayāti、行く者 sa mad-bhāvam yāti ([バガヴァッド・ギーター8章5節](#)) mad-bhāvam その人は主の持つと同じ精神的体を得る、あるいは同じ精神的自然・性質 natureを。超越主義者たちには異なる種類があります、既に先に説明しましたように。brahmavādī、paramātmavādī、そして献身者たち。精神的天空すなわちbrahmajyotiの中に精神的惑星群があります。無数の精神的惑星。既に論じました。それらの惑星の数は、この物質界の全ての宇宙より遥かに、遥かに多いのです。この物質界はekāmsēna sthito jagat ([バガヴァッド・ギーター10章42節](#)) これは創造全体の1/4の部分出現です。創造の3/4は精神界であり、この創造の1/4の部分に何百万という宇宙があります。それが今現在我々が経験しているものです。そしてその1つの宇宙内に何億何十億という惑星があります。ですからこの全物質界には無数の太陽、星、月、があります。しかしこの全物質界は創造全体のただ出現の1/4を構成する。3/4は精神的天空にあります。このmad-bhāvam、至上ブラフマンの存在へ溶け込むことを欲する者は、至上主のbrahmajyotiに溶け込む Mad-bhāvamはbrahmajyotiの中にある精神的惑星群と同様にbrahmajyotiも意味します。そして献身者たち、主との交際の中で楽しむことを望む者たちは、諸惑星、ヴァイクンタ諸惑星に入ります。無数のヴァイクンタ惑星があり、主は、至上主クリシュナは、その完全拡張plenary expansionナーラーヤンにより、四本腕、異なる名を持つナーラーヤン プラデyumナ、ア Niludda、マーダヴァ、ゴーヴィンダ・この四本腕のナーラーヤンの名は沢山数え切れないほどあります。その諸惑星の1つ、それもまたmad-bhāvam、それもまた精神的自然の内部にある。どの超越主義者も、生の終わりに、brahmajyotiを思う、Paramātmāについて瞑想する、至上主神格シュリー・クリシュナを思う、どの場合も精神的天空へと入る。しかし

献身者たちだけ、至上主との個人的なふれあいを修練した者たちだけが、ヴァイクンタ諸惑星あるいはゴロカ・ヴリンダーヴァン 惑星へと入る。主は言われる yah prayāti samad-bhāvam yāti nāsty atra samśayaḥ ([バガヴァッド・ギーター8章5節](#)) 疑いはない。疑うべきではありません。それが問題です。全人生を通してバガヴァッド・ギーターを読み続け、しかし主が我々の想像と符合しないことを話すと、それを拒否する。それはバガヴァッド・ギーターの読書法ではありません。ちょうどアルジュナは言った sarvam etam ṛtam manye "我は全てを信ず 主が言われし全て何であれ" 同様に、聞く、聞くこと。主は言う、死の時に、彼を思う者は誰であれ BrahmanあるいはParamātmāあるいは至上主神格いずれであれ、確かにその者は精神的天空へと入る。それについて疑いはない。それを疑うべきではない。そしてそのプロセス、一般則、もまたバガヴァッド・ギーターに述べられています。どのように人はできるか、どのように精神的王国に入り行くことが可能か。ただ至上なるものを死の時に思うことで。一般的プロセスも言及されています ([バガヴァッド・ギーター8章6節](#)) ([バガヴァッド・ギーター8章6節](#))

さまざまなbhāvaがあります。この物質的自然もbhāvaの一つです。既に説明しましたように、この物質的自然も至上主のエネルギーのうちの一つの表示です。ヴィシュヌ・プラーナにおいて至上主の総エネルギーが要約されています ([チャイタンニヤ・チャリタームリタ マディヤリラ6.154](#)) エネルギー、勢力、の全て ([チャイタンニヤ・チャリタームリタ マディヤリラ13.65解説](#)) 至上主は多様なエネルギーを有する、無数のエネルギーを。我々には想像もつかないものです。しかし偉大な学識ある聖者たち、解放された魂たち、彼らは研究し、エネルギー全体を3部、3つの題目、に要約しました。一番目は、全てのエネルギーはviṣṇu-śakti。全てのエネルギー、それらは主ヴィシュヌの様々な勢力である。そのエネルギーはparā、超越的である。そしてkṣetra-jñākyā tathā parā 生命体たち、kṣetra-jña。彼らもその高位のエネルギーのグループに属する。それはバガヴァッド・ギーターにおいても確証されています。既に説明いたしました。そして他の諸エネルギー、物質的エネルギーはtṛtīyā karma-samjñānyā ([チャイタンニヤ・チャリタームリタ マディヤリラ6.154](#)) そのエネルギーは無知のモードにある。それが物質的エネルギーである。物質的エネルギーもbhagavad-(聞き取り不能)である。ですから死の時に、物質的体、物質世界、に留まるか、あるいは精神界に移動するか。それが規範です。バガヴァッド・ギーターは言う ([バガヴァッド・ギーター8章6節](#)) ([バガヴァッド・ギーター8章6節](#)) 我々には習慣で、この物質的エネルギーあるいは精神的エネルギーのどちらかを考えることが習慣です。ではどのように思考を移動させるか。物質的エネルギーを考える、どうすればそれを精神的エネルギーを考えることに移動できるか。精神的エネルギーにおいて考えることに関してはヴェーダ諸文献があります。物質的エネルギーにおいて考えるには、たくさんの本があります。新聞、雑誌、文学、小説、たくさん。あふれています。我々の思考はそうした本類に没頭しています。同様に、自らの思考を精神的雰囲気・環境に移動したいのであれば、自らの読む能力をヴェーダ文献に移動させなければなりません。学識ある聖者たちは故に非常に多くのヴェーダ文献、プラーナ、を作成しました。プラーナは物語ではありません。歴史記録です。チャイタンニヤ-チャリタームリタに次のように読む詩節があります ([チャイタンニヤ・チャリタームリタ マディヤリラ20.117](#)) それら忘れた生命体たち、条件付けられた魂たち、彼らは至上主との関係を忘れてしまい、物質的諸活動を考えることに専心している。彼らの思考力を精神的能力に移動するために、クリシュナ・ドウヴァイパーヤナ・ヴァーサ、彼は非常に多くのヴェーダ諸文献を作成しています。ヴェーダ諸文献というのは、最初に彼は諸ヴェーダを4つに分けました。そしてそれらを諸プラーナにより説明しました。それから能力に欠ける者達、ストウリー、シュードラ、ヴァイシャ、のために、マハーバーラタを作成しました。そしてマハーバーラタ中にこのバガヴァッド・ギーターを挿入しまし

た。それから再び、ヴェーダ文献全体をヴェーダanta -スートラに要約しました。さらにヴェーダanta-スートラへの将来のガイダンスとして、彼自身による自然な解説を作成しました。それがシュリーマド-バーガヴァタムと呼ばれるものです。

シュリーマド-バーガヴァタムはbhāṣya 'yam brahma-sūtrāṇāmと呼ばれます。それはヴェーダanta-スートラの自然な注釈です。それら全ての文献、我々が自らの思考を移動するならば tad-bhāva-bhāvitaḥ, sadā. Sadā tad-bhāva-bhāvitaḥ ([バガヴァッド・ギーター8章6節](#)) 常に従事する者は・物質主義者が常に何か物質的な本を読むことに従事するように、新聞、雑誌、小説、文学、などに、そして科学的なもの、あるいは哲学や、思考の異なる次元のこれら全て。同様に我々が自らの、その読む能力をそれらヴェーダ文献へ移動するならば、提供された、ヴァーサデーヴァにより大変親切にも提供されたとおりに。そうすれば全く可能になる、死の時に至上主を思い出すということが。主御自身が奨める唯一の方法がそれです。示唆ではない、それは事実です Nāsty atra samśayaḥ ([バガヴァッド・ギーター8章5節](#)) 疑いなく。それについて疑いはない Tasmāt、故に主は奨める tasmāt sarveṣu kāleṣu mām anusmara yudhya ca ([バガヴァッド・ギーター8章7節](#)) 主はアルジュナにアドバイスする mām anusmara yudhya caと。彼は言わない、"君はただ我を思い続けそして君の現在の職務を捨てよ"とは。言わない。それは奨められていない。主は非実際的なことは決して奨めません。この物質界で、この体を維持するために、人は働かなくてはならない。労働は社会秩序の4区分に分けられます ブラーフマナ、クシャトリア、ヴァイシャ、シュードラ。社会の知識階級、彼らは違った方法で働く。社会の統治階級、彼らもまた違った方法で働く。商人階級、生産者階級、彼らもまた違った方法で働く。労働者階級、彼らもまた違った方法で働く。人間社会では、労働者として或いは商人として或いは政治家、統治者、或いは知識階級という最高の階級、文芸或いは科学研究、として、いずれか、誰でも皆何らかの労働に従事します。働かなければなりません、生きていくために。主はアドバイスします "君は君の職務を捨てる必要はない、しかし君は同時に思い出せる Mām anusmara ([バガヴァッド・ギーター8章7節](#)) それが君を 死の時に君が我を思い出す助となろう 常に我を思い出す 修練せずば 君の生存への苦闘と共に、でなければそれは可能ではないのだ" それは可能ではない。同じことが主チャイタンニャによってもアドバイスされています kīrtanīyaḥ sadā hariḥ ([チャイタンニャチャリタームリタ アディリラ17.31](#)) Kīrtanīyaḥ sadā 人は常に主の御名を唱える修練をしなければならない。主の御名と主は違います。主クリシュナからアルジュナへの指示があります mām anusmara([バガヴァッド・ギーター8章7節](#)) と。"君はただ我を思い出せ"。そして主チャイタンニャの指示 "君は常にクリシュナの御名を唱えよ"。ここでクリシュナは言う "君はただ我を思い出せ" すなわち君はクリシュナを思い出せ。そして主チャイタンニャは言う "君は常にクリシュナの御名を唱えよ"。違いはありません。なぜならクリシュナとクリシュナの名は異なるからです、絶対実在においてin the Absolute。絶対状態においては、ひとつのものと他のものとの間に違いはありません。それが絶対の状態です。主は絶対であるから、主の御名と主御自身は異なる。ですから我々はそのように修練しなければなりません tasmāt sarveṣu kāleṣu ([バガヴァッド・ギーター8章7節](#)) 常に、24時間、我々は自らの生の諸活動をあてはめなくていかななくてはなりません、24時間思い出せるように。そんなことが可能でしょうか? はい、可能です。可能なのです。これに関してとても露な例がアーチャーリヤたちにより出されています。その例とは何でしょう? 一人の女性が他の男性に執着し、しかしその女性には夫がある、それでも他の男性に執着している。こういった類の執着は非常に強くなる parakīya-rasaといます。男性でも女性でも。男性が妻以外の女性に執着する。女性が夫以外の男性に執着する。その執着は非常に強い。その執着は非常に強い。アーチャーリヤたちは悪いキャラクターとしてこの例を出します、他の女性の夫に執着する女性。彼女は常に考える、そして同時に、夫には家事

に忙しいところを見せる。夫が彼女を疑わないように。彼女はいつも思い出している。夜、恋人と会う時間のことを。全ての家事をうまくこなしながらも。同様に人は至上の夫、シュリー・クリシュナを思い出さなくてはなりません。自らの物質的義務をうまくこなし、それをものともせず、常に。それは可能です。それには必要です。強い、強い愛情が。

至上主への強い愛情を感じる時、そうすれば我々は自らの義務を遂行し続けることが可能になります、同時に主を思い出すことも。我々はその感覚を発達させなければなりません。アルジュナは常に主を考えていました、24時間、1秒もクリシュナを忘れられなかった。クリシュナの忠実な不変の友達。同時に、戦士。主クリシュナはアルジュナにその戦いを捨てよとはアドバイスしませんでした。森へ行け、ヒマラヤへ行き瞑想せよ、とは。ヨガのシステムが教えられたとき、アルジュナは辞退しました"この方法は私には可能ではない"と。すると主は言われた *yoginām api sarveṣāṁ mad-gatenāntarātmanā* ([バガヴァッド・ギーター6章47節](#)) ([バガヴァッド・ギーター6章47節](#)) 至上主を常に考えている者、その者は最も偉大なヨギーである。最超のギャーニーである。そして同時に最も偉大な献身者である。主はアドバイスします *tasmāt sarveṣu kāleṣu mām anusmara yudhya ca* ([バガヴァッド・ギーター8章7節](#)) "クシャトリアとして君は君の戦いの仕事を放棄はできぬ 君は戦わねばならない 同時に我を常に思い出す修練をするならそれが可能となるのだ" *anta-kāle ca mām eva smarān* ([バガヴァッド・ギーター8章5節](#)) "そして死の時に我を思い出すことも可能となる" ([バガヴァッド・ギーター8章7節](#)) 再び主は言う、疑いはない、と。主への奉仕に完全に身を委ねるなら、主への超越的で愛情に満ちた奉仕に身を委ねるなら *mayy arpita-mano-buddhir* ([バガヴァッド・ギーター8章7節](#)) なぜなら我々には我々の体とともに働いているのではない。我々は意と知性ととともに働いている。我々の知性と意が常に至上主への思考に従事するなら、そうすれば自然に、我々の感覚も主への奉仕に従事する。それがバガヴァッド・ギーターの真義・秘義です。人はこの技を学ばなくてはならない。どうすれば没頭できるか。意と知性の両方で、24時間、主を思うことに没頭できるか。それが神の王国へ移動する助けとなります。精神的環境へと、この物質的体を去った後に。現代科学者たち、彼らは月へ到着しようとは何年も試みています。まだ到達できていません。しかしバガヴァッド・ギーター中に、ここに示唆があります。人があと50年生きるとして、誰も50年、精神的概念において自分自身を高めようとしなさい。それはとてもいい考えです、しかしたとえ10年でも5年でも真剣にこの修練をする *mayy arpita-mano-buddhir...* ([バガヴァッド・ギーター8章7節](#)) それは単純に修練の問題です。そしてその修練は非常に簡単に可能となります。献身の方法、*śravaṇam*、により。*Śravaṇam* シュラヴァナン 最も簡単な方法は聞くこと ([シュリーマド・バーガヴァタム7巻5章23節](#)) これら9つの方法、最も簡単な方法はただ聞くこと。

このバガヴァッド・ギーターあるいはシュリーマド・バーガヴァタムを、悟った人物から聞く、それが自身を、人を、訓練するでしょう、至上なる存在の思考に24時間入るように。それが究極的に、*anta-kāle*、至上主を思い出すことに導き、そうしてこの体を離れ、精神的体を持つことになる。精神的体、主と交際するにふさわしい。故に主は言われる ([バガヴァッド・ギーター8章8節](#)) ([バガヴァッド・ギーター8章8節](#)) *Anucintayan*、常にただ主を考える。これはさほど難しい方法ではありません。この方法は熟達した人物から学ばなければなりません *Tad vijñānārtham sa gurum evābhigacchet* ([ムンダカ・ウパニシャッド1.2.12](#)) 既に修練を積んだ人物に近づくべきである *abhyāsa-yoga-yuktena*。これは *abhyāsa-yoga* と呼ばれます、修練する。*Abhyāsa*、至上主をいつも思い出す方法。*Cetasā nānya-gāminā* 意、意はいつもあれこれ飛び回る。いつも意を集中する訓練をしなければなりません。至上主シュリー・クリシュナの形態・姿に。あるいは音、主の御名に、そのほうが簡単になり

ます。自分の意を集中させる代わりに、意は落ち着きがなくあちこち行くでしょうが、しかし私は私の耳をクリシュナの音の響きに集中することができる。それも私を助けてくれる。それも abhyāsa-yoga です。Cetasā nānya-gāminā paramam puruṣam divyam (バガヴァッド・ギーター 8章8節) Paramam puruṣa その至上主神格、精神的王国におられる、精神的天空に、人は到達できる、anucintayan、常に考えること。これらの方法、方法や手立て、全てはバガヴァッド・ギーターに述べられており、誰にも開かれています。特定の階級の人々だけが到達できるというわけではありません。主クリシュナを考えることは可能です、主クリシュナを聞くことは可能です、誰にでも。主はバガヴァッド・ギーター中で言われる (バガヴァッド・ギーター 9章32節) (バガヴァッド・ギーター 9章32節) (バガヴァッド・ギーター 9章33節) (バガヴァッド・ギーター 9章33節) 主は言う。生の最低の状態にある人も、生の最低の状態、たとえ墮落した女性でも、商人階級、労働者階級、商人階級、労働者階級、女性階級、これらは同じ分類に数えられます。彼らの知性はそれほど発達していないからです。しかし主は言う。彼らもまた、あるいはそれより低い者達 māṁ hi pārtha vyapāśritya ye 'pi syuh (バガヴァッド・ギーター 9章32節) 彼らだけではなく、それより低い者達、或いは誰でも。その人が誰かやその女性が誰かは問題ではない、バクティ・ヨガのこの原則を受け取り、至上主を生の上善として受け取る、最高の目的、生の最高の目標、として (バガヴァッド・ギーター 9章32節) 精神的王国と精神的天空にあるその parām gatim、誰でも到達することができる。単にそのシステムを修練しなければならない。そのシステムはバガヴァッド・ギーターにとってもよく心得が指示されています。それを採用し自らの生を完璧にし、生の永久の解決法とすることができる。それがバガヴァッド・ギーター全体の要点です。故に結論として、バガヴァッド・ギーターは超越的文献である、人はそれを注意深く読むべきである。Gītā-sāstram idaṁ puṇyam yaḥ paṭhet prayataḥ pumān (ギーター・マハートミヤ1) そして結果は、適切に教示に従うなら、生の全ての苦しみから自由になれる。生の全ての不安から。Bhaya-śokādi-varjitaḥ (ギーター・マハートミヤ1) 生の全ての恐れ、この生で、また次の生で精神的生を得るでしょう (ギーター・マハートミヤ2) もう一つの利点は、バガヴァッド・ギーターを、とても真摯にそして真剣に、読むなら、主の恩寵により その人の過去の過ちの反作用は作用しなくなる、ということです。

主は高らかに言われる、バガヴァッド・ギーターの最終部分で ahaṁ tvāṁ sarva-pāpebhyo mokṣayiṣyāmi mā śucaḥ (バガヴァッド・ギーター 18章66節) 主が責任を負われる。主に身を委ねる者、主が免罪を保証する、罪の全ての反作用から保護すると責任を負われる。(ギーターマハートミヤ3) (ギーターマハートミヤ3) 毎日沐浴することで己を洗う。しかしバガヴァッド・ギーターの聖なるガンジス川の水にひとたび沐浴する者、その者の、汚れた物質の生は一切滅する (ギーターマハートミヤ4) (ギーターマハートミヤ4) バガヴァッド・ギーターは至上主神格により語られたものであるから、故に人々は人々は他のヴェーダ文献は読まずともよい。ただ注意深くそして規則的にバガヴァッド・ギーターを読みそして聞くならば gītā su-gītā kartavyā... そしてこれを是非とも採用すべきで Gītā su-gītā kartavyā kim anyaiḥ śāstra-vistaraiḥ 現代では人々は非常に多くの物事に惑っており、注意を全ヴェーダ文献に転ずることはほぼ不可能である。この一つの文献がそれを為す。なぜならこれは全ヴェーダ文献の精髓であり、特に至上主神格により語られしものであるから。(ギーターマハートミヤ5) (ギーターマハートミヤ5) ガンジス川の水を飲む者、ガンジス川の水を飲む者、その者も解放を得る、といわれる。ならばバガヴァッド・ギーターはいうまでもない。バガヴァッド・ギーターはマハーバーラタ全体における甘露、ヴィシュヌにより語られる。主クリシュナは太源のヴィシュヌ。Viṣṇu-vaktrād viniḥsṛtam それは至上主神格の口よりいずる gaṅgodakam ガンジス川は主の蓮華の御足より流れ出るといわれ、バガヴァッド・ギーターは主の口より流れ出る。勿論、至上主の口と足の間に違いはありません。な

お、中立的立場から我々は考察できます、バガヴァッド・ギーターはガンジス川の水よりもさらに重要であると。(ギーターマハートミヤ6)(ギーターマハートミヤ6) そう…このギーター・ウパニシャッドは牛のよう。主は牧童として知られ、主はこの牛の乳を絞っておられた。Sarvopaniṣado これは全ウパニシャッドのエッセンスであり牛として表現される。熟練した牧童である主、彼が乳を搾っておられる。pārtho vatsah そしてアルジュナは子牛のよう su-dhīr bhoktā 学識高い学者たちと清浄な献身者たち、彼らがこの乳を取る Su-dhīr bhoktā dugdham gītāmṛtam mahat バガヴァッド・ギーターの甘露、乳、は学識高い献身者たちの為のもの。(ギーターマハートミヤ7)(ギーターマハートミヤ7) 世界はバガヴァッド・ギーターから学ばねばならない、授業から。Evaṁ sāstram devakī-putra-gītam たった一つの経典がある、一つの共通の経典、全世界の為、世界中の人々の為の。それがこのバガヴァッド・ギーターである Devo devakī-putra eva 全世界の為の一人の神、それがシュリー・クリシュナである eko mantras tasya nāmāni そして一つの讃歌、マントラ、たった一つの讃歌、一つの祈り、つまり一つの讃歌、は彼の御名を唱えること、ハレークリシュナハレークリシュナクリシュナク リシュナハレーハレー ハレーラーマハレーラーマラーマラーマハレーハレー Eko mantras tasya nāmāni yāni karmāpy ekam tasya devasya sevā たった一つの仕事、それは至上主神格に奉仕すること。バガヴァッド・ギーターから学べば、人々は切望する。一つの宗教、一人の神、一つの経典、そして一つの仕事すなわち生において一つの活動、を持つことを。これがバガヴァッド・ギーターに要約されています。その一人の、一人の神、がクリシュナである。クリシュナは宗派の神ではない。クリシュナという名から…「クリシュナKṛṣṇa」の意味は、先に説明しましたように、「クリシュナ」の意味は「無上の歓喜」です。

[http://vanisource.org/wiki/660219-20 - Lecture_BG_Introduction - New York](http://vanisource.org/wiki/660219-20_-_Lecture_BG_Introduction_-_New_York)
http://prabhupadabooks.com/classes/bg/1/new_york/february/19/1966?d=1